

論文の内容の要旨

農業・資源経済学 専攻

平成 14 年度博士課程 進学

氏名 神代 英昭

指導教官 谷口 信和

論文題目 こんにゃくのフードシステム研究
品目別視点に基づく構造論的接近

近年、日本人の食生活は大きく変化し、「食」の外部化や社会化が進展した。生産から消費に至るまでの間に、加工工程を経由することが一般化し、多くの産業や主体が関わるようになった。こうしたフードシステムの成長によって、豊かな食生活が実現したが、その反作用も多様な局面で発現し、深刻な社会問題も表面化している。つまり、「農」と「食」の距離が拡大し、その関係性も複雑化したのである。その結果、個々の経済主体から見れば、全体への寄与が間接的であったり、部分的であったりするため、直接的な関係性が認識されにくくなっている。このような状況下では、システムの全体像を意識的に視野におさめ、システムに沿いながら食をめぐる問題を考えていくことが必要となる。そのため、フードシステム研究に対する期待は著しく高まっている。しかし、その研究方法は必ずしも確立していないため、今なお、具体的な実証研究を必要とする段階にある。

本稿では、こんにゃくを対象とした、フードシステムの実証研究を目的としている。第 1 部第 1 章では、フードシステム研究をめぐる問題状況を整理した上で、こんにゃくが特徴的な商品特性を持つため、フードシステム研究の対象として非常に重要な品目であることを明らかにした。それは、第 1 に、古くから加工工程を経由する食品であるため、加工主体の性格の変化とフードシステムとの関係性について分析しやすく、

そして第 2 に、汎用性が低いことを要因としてシンプルなフードシステムを特徴としているため、品目別分析に適しているからである。

第 2 部では、こんにゃくのフードシステムにおける構造変化に関して、動態的かつ総合的な把握を課題とした。具体的には、こんにゃくの商品特性と加工工程の特徴を考慮した上で、基礎条件として消費構造と加工技術に注目しながら、主体間関係の変化の解明を試みている。その際、商品の生産・加工・流通（第 2 章～第 5 章）、付加価値の分配（第 6 章）という 2 つの側面から接近し、前者については、時期別の分析を行った。

第 2 章は、戦後から 1960 年代までを対象としている。基礎条件に注目すれば、消費は量的には拡大しており、加工技術は原始的な段階にあった。特に、加工技術の水準の低さが影響し、2 つの局地的な原料・製品市場が併存していた。具体的には、東日本では製粉加工工程を挟む精粉法、西日本では製粉加工工程を挟まない生イモ法が主流であった。こうした原料・製品市場の地域性は、栽培歴や食習慣の形成期における地域差など、歴史性との関係が強い。

また、技術水準が低かったため、イモ・製品の低い保存・流通適性による影響も強く、流通範囲は限定されていた。この時期においては、各地域内で主体間が隣接する連鎖関係と、零細規模の主体が多数存在する「原子的」な競争構造を特徴とした。

続く第 3 章が対象とする 1970 年代から 1980 年代前半は、基礎条件に注目すれば、消費は量的な飽和局面に移行し、主要な加工工程において技術革新が生じた時期である。この時期には、小売主導型流通システムへの転換によってコストの削減が、また高度経済成長期の労賃コストの高騰によって省力化への対応が求められた。両者の条件を満たした精粉法が全国的に浸透し、原料・製品市場が単一化していく。つまり、基礎条件の変化に影響されて、供給システムの単一化と効率化が進行したのである。

また、各部門においては、新技術の導入者を中心とした構造変化が進行している。第 1 に、製造・小売部門では、包装工程や製造工程における機械導入に積極的な製造業者が、スーパーとの取引関係を獲得し、成長していく。第 2 に、原料供給部門では、荒粉加工工程における技術革新が決定的であったが、その導入者は 1960 年代以前からの大規模原料業者に限定された。そこには、機械導入に伴う資金調達や原料調達の変化が影響している。こうして製粉加工部門では、歴史的な経路に依存した構造変化が起こり、イモ生産部門にも大きな影響を与えた。こうして、イモ生産・製粉加工部門においては、1960 年代以前から精粉法の経験を蓄積していた、群馬県の成長と集中が進行している。

そして第 4 章は、1980 年代中盤以降を対象とするが、その基礎条件に注目すれば、家庭用消費量の減少と業務用消費量の増加による、消費構造の転換が顕著な時期と言える。これを背景にして、海外の供給システムが急速に整備され、国内の供給システムに対する影響力が拡大していく。

またこの 1980 年代中盤以降は、製品輸入が急増した時期でもあった。1990 年代以降には、中国からの業務用仕向け製品が急増している。業務用仕向け製品は、作業工

程において労働集約的な部分が多いため、国際的な労賃の格差が反映しやすく、中国が有利な状況にある。つまり、この時期には変化した基礎条件の下で、経済的な状況の差異を利用しながら、生産・加工・流通の垂直的な分業関係が、国際的に再編されているのである。

以上のように、第2章から第4章における、商品の生産・加工・流通関係に注目した分析によって、基礎条件の変化と副構造への影響が明らかになったと言えよう。すなわち、第1に、消費構造に注目すれば、消費の量的な飽和や減少は、供給システムを単一化させる方向に作用した。さらに消費の質的な転換は、供給システムを多様化させる方向に作用している。また、第2に、加工技術に注目すれば、技術水準が低い段階では、各地域内で主体間が隣接する連鎖関係と、競争構造における原子的な状態を特徴とした。技術革新により、工程作業や商品の品質が標準化し、大量生産・大量流通システムが形成されている。その過程の中で、連鎖構造においては、垂直的な分業関係が広域的に再編され、競争構造においては、主体の規模拡大と集中化が進行したのである。

第6章では、第2部の第2の視点である付加価値の分配関係に注目して、主体間関係の変化に接近した。商品形態別価格の対応関係に注目すると、価格形成システムに大きな変化が見られ、付加価値の各主体への分配・帰属割合も大きく変化していた。1970年代の素材重視型のフードシステムから、1980年代中盤以降は川下主導型のフードシステムに転換していたことが明らかとなった。

第1の視点である商品の生産・加工・流通面から接近すると、新技術の導入者が大規模化し、集中度を高めていくのが特徴であった。しかし、第2の視点である付加価値の分配面にも注目すれば、取扱量シェアの拡大が付加価値の分配・帰属金額の増加につながるかどうかは、部門や主体によって大きく異なっている。スーパーでは、取扱量シェアの拡大に加えて、1商品あたりの分配・帰属割合の上昇が相乗的に作用し、付加価値は大幅に増加した。その結果、小売部門における地位が高まっているだけでなく、フードシステム全体において、その影響力が大きくなっている。それとは対照的に、群馬県のイモ生産・製粉加工部門では、取扱量シェアの集中が顕著であったのだが、1商品あたりの分配・帰属割合の減少がそれ以上に著しかった。その結果、付加価値の分配・帰属金額は大きく減少している。ここで明らかのように、フードシステムにおけるメインプレーヤーが川上部門から川下部門へと大きく移動しているのである。

第3部の第7章では、こんにゃくのフードシステムの再編の方向性を検出することを課題とした。特に、付加価値の分配・帰属割合が大きく減少している川上・川中部門に焦点を当て、そのような状況への各主体の対応を分析している。そのため、現時点においてこうした問題を乗り越えているような、2つのタイプの先進事例に注目した。

第1に、他段階へ進出するタイプである。それは、1経営主体が、従来の専門的な部門に加えて、自ら他段階に進出することを指す。ここでは、農家がイモを作るだけ

でなく、製品の製造や販売に展開している事例を分析した。他段階へ進出する場合、その規模は小さく、自らの専門部門の特徴を強化する方向でなされていた。それによって商品が差別化され、小売価格を自主的に設定できている。さらに、他段階の機能を内部化しているため、付加価値の分配・帰属割合も上昇し、高い収益率を実現していた。

また第2のタイプは、協調・連携関係を構築する対応であり、それは系列性を持たない多段階の意思主体が、共通目的の実現のために、協調しながら連携する関係を結ぶことを指す。ここでは、有機無農薬栽培したイモの製品化を共通目標として、農家、イモ仲買人、原料業者、製造業者が連携している事例を分析した。多段階の参加主体が、各自の得意な機能を発揮しながら、協力している。それによって、新しい商品価値を実現し、高い付加価値を獲得している。また、長期間に渡る安定的な連携関係の下で、各主体の役割に応じて、付加価値が分配されている。その結果、参加主体の経営の再生産条件が安定化していた。

こうした2つのタイプに共通して、これまでの一般的な構造変化の方向性とは異なるような、他部門との関連性を深める動きが見られる。そうした行動によって各自の経営資源を強化し、総付加価値の増加や分配・帰属割合の向上が図られていた。そして、このような動きは、供給主体の側から見れば、経営の再生産条件の回復につながっている場合が多い。また消費者の側から見ても、開発された商品によって、新たに高い効用が得られている場合が多いことも明らかである。つまり、供給主体と消費者の双方にとって状況が改善されており、こんにゃくのフードシステムの再編の一つの方向性を示唆していることは間違いない。